

# 自己

明日を楽しく過ごすためにも、  
知っておきたいことがあります

# 表現

1

Jan 2008

昭和38年6月3日第三種郵便物認可 平成20年1月1日発行  
毎月1回1日発行 第46巻第1号(通巻523号)

特集

## 今の若者に言いたい!

「21世紀人」の若者だからこそ、  
享受できる特権がある

／千葉商科大学大学院教授 斎藤精一郎

変化を望むなら自ら起こして

／隔月刊「オルタナ」副編集長 木村麻紀

辛口バァサンは働く若者の応援団

／前台湾総統府国策顧問 金美齡

「リアル」なコミュニケーションを大切に

／フリーアナウンサー 梶原しげる

連載エッセー 人生道場

角田信朗

リレーエッセー 明日への言葉

フォトジャーナリスト

桃井和馬



匠の技

# 竹と和紙があやなす雅

和傘職人 西堀耕太郎さん

京和傘——言葉の響きそのままに古の雅を今に伝える。野点傘、舞傘、蛇の目傘。用途に応じて機能と芸術性を高めた、日本文化が生んだ逸品である。

人形寺で有名な宝鏡寺門前に軒を構える日吉屋は、創業百余年。茶道家元の表千家、裏千家御用達の本式野点傘の制作を唯一許されている大店だ。当主は若き五代目・西堀耕太郎さん。

手作り工芸品の中でも、これほど複雑に動くものは少ない。竹と和紙という自然素材を用いるだけに、丹念に仕上げなければ開閉さえできなくなる。

和傘は1本の竹を40ほどに割って子骨を作り、組み上げて和紙を張り、装飾を施して完成する。ある工程のうち最も神経を使うのは、やり直しができない和紙の糊付け。作業をする指先は、器用な思いつかひを感じ取るうとするかのように慎重だ。

最近和傘の風合いを生かした照明作りも手掛ける西堀さん。和傘は1000年もの歴史の中で変化し、洗練されてきた。“伝統とは革新の連続”を信条に、今日も和傘の可能性と向き合う。

